

Newsletter

April 2007

<http://www.aack.or.jp>

目次

梅里雪山峰遭難記念碑建立の報告	中川潔、左右田健次	1
梅里雪山 搜索活動の報告	小林尚礼	3
AACK人物抄	谷博さん(一九一〇〜一九八八)	4
青海から西蔵、雲南の旅の報告	平井一正	4
青蔵鉄道乗車記	齋藤惇生	6
第十回「岡山の山を登る会」	潮崎安弘	8
雲南・東蔵考察団道中記(上)	田中昌二郎	9
東チベット山村の住居	松井千秋	15
茶馬古道―グロ―バリゼーションとローカリズム	松林公藏	21
茶馬古道 東チベット一八〇〇kmキャラバン	石根昌幸	22
事務局報告・理事会議事録		23
AACK海外登山・探検助成制度の案内		24
日本山岳協会・山岳共済の案内		24
AACK総会の案内		27
会員動向		27
編集後記		28

梅里雪山峰遭難記念碑建立の報告

中川潔、左右田健次

一九九一年一月、日中合同梅里雪山学術登山隊が登頂を前にして遭難してから一六年が経ちました。仏式に従えば、一七回忌の年に当たります。このほど、日中双方(京大富士山岳会と中国登山協会、雲南省並びに明永村)が協力して一九九八年からの搜索活動に携わったことを記念し、遭難した一七人の隊員の霊を弔うために記念碑を建立しました。昨二〇〇六年一〇月二八日、中国雲南省梅里雪山の麓の明永村で、記念碑建立の除幕式典が行なわれました。これからも、遺体や遺品の搜索は続きますが、記念碑建立により、八年間の搜索活動に一応の区切りを付けることができました。関係各位のお力添えに感謝すると共に、記念碑建立に伴う明永村、雲南省、徳欽県での状況を報告します。

(一) 明永村

この搜索活動は本会の小林尚礼会員の真摯な努力と明永村を中心とする地元の人びとの献身的な助力なしにはあり得ませんでした。ですか

ら、今回の記念碑建立が地元でどう受け止められたかは大きな関心事でした。式典の冒頭に述べられたチャシ(札史) 村長のあいさつの大要は次のようでありました。

「日本の家族ならびに京都大学関係者の皆さま、遠い日本からわざわざお越しいただきありがとうございます。当村の氷河に遺体、遺品が発見されてから、この八年間、私たちは村ぐるみで搜索活動にあたりつてきました。日中協同行って来たこの搜索活動は、日中間の重要な民間交流となり、この活動を通じてわれわれは相互理解を深めることができたとと思います。とりわけ小林さんの献身的な努力にわれわれは感銘を受け、深い友情を築くことができました。遭難した一七人とわれわれは幽明、境を異にして、越え難い距離がありますが、この搜索活動を通じて、少しでもこの一七人の純粋な気持ちを理解し、その距離を縮めることができましたように思います」

このあいさつには、この式典が今までの八年間の搜索活動の総括であり、明永村の人びとが誠心誠意、搜索に当たり、ここに記念碑建立という一つの節目に到達したという感慨が込められていたと思います。

梅里雪山峰を望む明永村の景勝の地に建てられた記念碑の除幕は張俊

氏と岩坪五郎会員によつて行われました。式典では团长左右田がこれまでの村民の助力に深謝し、この記念碑建立が将来の日中友好の礎となることを希望しました。そして、謝意を表すために、チャシ村長に水道敷設補助金として四万元(約六〇万円)を贈りました。村長の計らいで、四万元の束を、現場に集まった村民たちに披露する配慮をしました。船原尚武隊員のご父君、尚氏が家族を代表して、この山に逝つた人びとへの愛惜の想いと搜索活動への感謝の念を述べられました。村民たちから大きな拍手が沸き、記念碑建立の意義と深い謝意を村全体に印象付けたと思います。なお、この式典における日中間の通訳や朗読は会員中川潔、熊柯連氏と張俊氏が担当しました。

明永村は全世帯五一戸の小さな山麓の村です。かつては車道も通じず、農牧畜業を細々と営んでいました。日中合同梅里雪山学術登山隊の活動と遭難、それに続く搜索活動などが一つの契機となり、また、村長の進取の気性や近年の中国政府の観光推進政策とあいまって、この山麓の村は驚くほど大きな発展を遂げました。現在、各世帯の平均年収は二万元(約三〇万円)に達し、この山城の村落の中では、際立つて豊かにして活気のある存在となっています。

チャシ村長は宴会の席上で、この状況に触れ「率直に言つて、梅里雪山の登山隊の活動やそれに続く協同の搜索という契機がなかったなら、この発展はあり得なかつたであろう。登山隊の活動とその遭難が引き起こしたマイ

ナス面は確かにあつたが、一方、それ以上にプラス面ももたらされたと思う。この発展の一つの遠因ともなつた登山隊の活動、協同搜索活動、そして今回の記念碑建立に心から感謝している。」と述べていました。

こうした村長の言葉や村の人々の親しげな表情から見て、記念碑の建立と水道敷設への援助を通して、われわれの感謝の気持ちは地元の人々に十分伝わり、今後の円滑な搜索活動にも益することがあつたと思います。また、村長を始めとする村人との信頼関係や協力が小林尚礼会員の地元での熱心な活動の上に築かれたことを付記します。

(二) 雲南省

これまで雲南省体育局の窓口となつて動いていた前体育局弁公室主任の張俊氏は、雲南体育運動職業技術学院の党委員会書記に転任しました。これによる双方の意思の疎通について若干懸念しましたが、梅里雪山学術登山隊に関しては今後も張俊氏が担当することが判明しました。張氏は今回の式典にも省体育局代表として出席していただきました。

除幕式典の事前の打ち合わせにおいて、当方から「この記念碑建立は地元への謝意の表明と共に、搜索活動の一つの節目である」旨を伝え、張氏も十分に理解してくれました。さらに、張氏は現職の学院書記としての多忙の中を、地元との連絡、調整や記念碑の制作、建立等に奔走しました。

このように張氏は今でも梅里雪山をめぐる省政府・シャングリラ自治州政府・徳欽県政

府・明永村と連なる官僚機構のトップに位置する人物であり、われわれのために雲南省政府関係筋と緊密に連絡をとつて動いてくれました。現在は省体育学院の責任者として北京五輪大会に向けての選手育成に精励しています。ですから同氏とは今後も相互信頼の上に良好な関係を保つていくことは重要だと思います。

(三) 徳欽県

徳欽県体育局のガオフォン(高虹)氏は既に定年の歳に達していますが、今も職に留まつて仕事を続けています。今回も式典に出席して、式典の仕切りやチベット仏教活仏による読経の手配などに動いてくれました。搜索に関して、村長ともども、一方ならぬ協力をしてくれた人であり、日本側家族から直接、深甚の謝意を伝えました。本人はその言葉に喜び、また、記念碑の建立と除幕式典に満足していました。大きく発展した明永村に対して、徳欽県政府の影響力は相対的に薄れているかもしれないが、われわれは徳欽の人びとも、密接な関係を保つ姿勢は大切でありましょう。

今回の記念碑の除幕式には色々な事情で中国側家族の出席はありませんでしたが、この記念碑は日本側隊員だけでなく、同志であつた中国側隊員の慰霊のためでもあることは論を待ちません。日本から参加された家族の方々も記念碑建立や明永村の人びととの温かい交流に満足されていました。今後も続く搜索活動が地元との協力のもとに円滑に、また、

安全に進むことを念じます。なお、搜索活動の状況については小林会員が別に記しています。記念碑建立式への訪問団の出発に際しては、広瀬顕隊長のご両親にはお見送り、お力添えを賜わり、また帰国の折にはAACR木村雅昭会長始め多くの方々に迎えをいただいたことに深謝いたします。

終わりに訪問団の日本側団員の氏名を順不同で記します。船原尚、船原恵美子、井上悦子、笹倉祥子、工藤タケ子、竹澤智子、岩坪五郎、小林尚礼の皆様と中川潔、左右田健次。
(二〇〇七年一月)

梅里雪山 搜索活動の報告

小林尚礼

二〇〇六年は、五月から一〇月にかけて五回の遺体搜索を行いました。しかし、いづれも発見物は少なく、最後に残された清水隊員の遺体を確認することはできませんでした。二〇〇五年・二〇〇六年と発見量の少ない年が続いています。

一九九八年から続けている搜索活動によって、一六人の遺体を含む約一トンの遺品を収容しました。ですが、検討によると、まだ一〜三割の遺体・遺品が氷河に残っていることが推測されます。

明永氷河の末端はここ数年で大きく後退しており、氷河の流速を考えると、残された遺

体・遺品は早くも今年に、もしくは数年内に川へ流出する可能性があります。そうなれば観光客の目に触れたり、明永村の農業用水に現れたりして問題となるでしょう。最後の一人が確認されていない状況を考えると、もしばらく遺体・遺品の状況を見守る必要があります。明永村を始めとする中国側は、今後の搜索活動にこれまで通りの支援を約束してくれました。

遭難直後に造った飛來寺の慰霊碑が、傷ついていることが問題となっています。昨春秋に訪問団がお参りした際、雲南省体育局代表



明永村の新しい記念碑と、建立式に参加されたご遺族

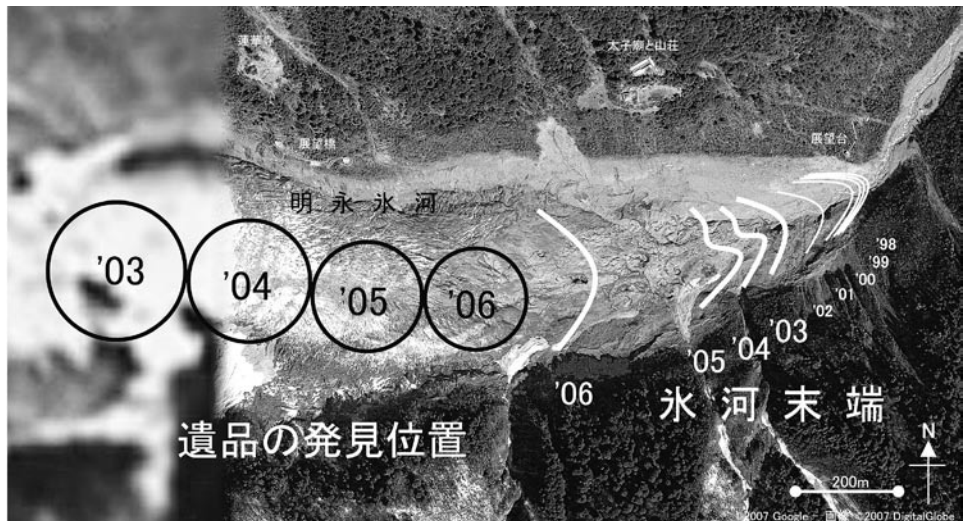


図 遺品発見位置と氷河末端の移動（2003年～2006年）衛星写真：Google Map

の張俊氏は、碑を拭き清める家族の姿に涙して、「傷ついた碑の修復と維持に責任を持つ」ことを確約しました。まだ問題は残されていますが、早い時期に慰霊碑を修復する方向で調整を行います。

(二〇〇七年一月)

AACK人物抄

谷博さん（一九一〇～一九八八）

平井正二

一、プロフィール

AACKはその創設のときに、ヒマラヤに関心のある人の同志的結合を目指し、特に京都大学を卒業していることは会員の条件にしていなかった。それは社団法人になっても同様である。そのような会員のひとりには谷博（以下敬称略）がいる。

谷博は一九二八年（昭和三年）京都一中卒、予科から京都府立医大に進み、三六年卒業。内科学教室副手を経て四一年大阪麹町病院。



四三年には軍医少尉として南方派遣、四六年一二月復員、故郷の北桑田郡美山で父君の後をついで医院開設。以後地元高校や中学、

保育園の校医をつとめ、また北桑田郡ライオンズクラブ会長、など、地域に大きな貢献をしたが、晩年の長い闘病生活の末、八八年二月逝去、享年七十七歳。

谷は今西錦司らと親交があり、三五年の白頭山遠征にも隊員に名を連ねている。また一九三六年のAACKのK2計画では、伊藤愿と共に有力な登頂隊員として期待されていた。たしかに伊藤と谷がザイルを組んだら、岩登りの当時の最高のペアであり、すばらしい登攀がなされたに違いない。それほどこの兩名は岩登りに関して、当時めざましい活躍をしていた。

AACK会員に限らず、現在谷という登山家を知る人は少ない。その意味でもここに彼の人物を紹介する。

二、ジャンダルム飛驒尾根初下降

谷の師匠と仰ぐのは、一九四九年に没した京都府立医科大学予科の旅行部部长の北上四郎（生物学教授、四高山岳部出身）である。北上は一九二八年に笠が岳穴毛谷四の沢を単独で初登攀した他、笠が岳東面の岩場の開拓、ジャンダルム飛驒尾根、滝谷第四尾根など輝かしい初登攀の記録をもつ。

特にジャンダルム飛驒尾根は、当時多くのクライマーが狙っていた。京大の伊藤愿と甲南高校の田口一郎が一九三〇年七月一七日にその初下降に成功したと思つて、伝令を走らせ、大阪朝日新聞に登攀成功のニュースを伝えたものであった。ところが同じ瀬沢岩小屋に泊まっていた谷から、「あれは昨日ぼくら

も登った」と聞かされて、さすがの伊藤愿の顔が蒼白になったという。

実は北上は単独でその前日の七月一六日午前に初下降をなしている。谷とは奥穂の上で会い、谷が「もう一度私をつれて引き返してくれませんか」という要請に快く引き受け、午後第二下降をしている。北上はストイックなアルピニズムの信奉者であったから、ケルンなどを残さず、ピトンなどは極力打たなかった。だからその記録をめぐる議論が起ったことが多い。

谷は師の北上の影響をうけたせいか、記録をあまり残していない。上記のジャンダルムも、諏訪多栄蔵あての書簡で三〇年ぶりにあきらかになったものである。彼は登山を内心の情熱の凝固したものとしてとらえ、外面の世界の評価などは意識していなかったようである。もし彼がヒマラヤに行つてマスコミの寵児になつたら、ヒマラヤ遠征を疑問視したであらう。

ただ言えることは、谷は北上とともに、当時山岳界であまり注目されていなかった京都府立医大を、一躍注目されるように引き上げた功労者であることである。

三、滝谷や明神岳での足跡

谷は穂高周辺の岩場に多くの足跡を残している。一九三〇年滝谷第二尾根下降（初踏破）、第三尾根初登攀のほか、一九三二年七月に下又白谷から奥明神岳東尾根を単独で初登攀している。靴が壊れたので地下足袋で下又白谷をつめていったが、巨大な残雪の乗り越しに

難渋し、また崩壊性岩壁の上の草付きのトラスに、単独、地下足袋という恐怖に肝を冷やしたが、ついに奥明神岳東稜の一角に到達し、初登攀に成功した。

この他鹿島槍天狗尾根（三二年六月、単独初登攀）、同年七月二八日、北上らと澗沢槍東稜左リッジを初登攀、そのまま澗谷D沢を下降し、澗沢岳西尾根フランチを初登攀、またその翌二九日は澗谷第四尾根を登っているが、これは八日前に早稲田大の今井、小川が初登攀したばかりのルートである。さらに三一日は小川登喜男らの東大パーティが明神岳五峰東壁中央リンネを初登攀するが、谷は単独で後続した。それが小川の記録に見えている。谷は核心部を回避したが、穂高連峰の初登攀、第二登争いの先陣を切っていたことがわかる。個人の記録としても、先に紹介した伊藤愿と双壁であろう。

まだまだ谷の活躍は続く。三三年一月三、四日、八高の竹内と澗谷第二尾根を冬季第三登をなした。八日前と半日前に早稲田大隊により初登攀と第二登が行われ、谷らは一歩おくれた。半日前の足跡を発見して、谷は残念とは書いているが、日が暮れて月のあかりで急傾斜の尾根を登るときに、先行者の跡がどれだけ多くの感謝の念をもって踏まれたことだろうと率直に認めている。彼らはワンピースパークの末生還したが、手足にひどい凍傷を負った。谷はこの厳しい登攀中、ニーチェの詩「北の彼方、氷と死との彼方、そこに吾等の生命があり、歓喜がある」が、たえず頭の中で火花を散らしていたと書いている。

三四年一月には槍が岳東壁の初登攀に成功したと思つて、雑誌ケルンに発表したが、実はここはすでにウエストンが登っていることが後で判明し、「岳人」四〇号（五一年）でそれを認めている。

世に知られている谷の大きな登攀記録は、このあたりで終わっている。ただ彼は一面熱心な研究者であった。六一年、岳人一五七号に「岩場を求めて」という一文をよせ、その中で、今でこそ知られているが、当時は無名の岩場であった明星山や奥鐘山の岩場を紹介している。

四、白頭山遠征そしてその後

谷は穂高連峰を舞台に、息づくひまもない初登攀につぐ初登攀の活躍をしていたが、その延長線上に当然ヒマラヤの未踏の頂を踏むことも視野に入れていたであろう。今西錦司と親交があったことからそれは言える。そしてその実現の第一歩として白頭山遠征がある。

先に述べたように谷は三四年から三五年にかけて、今西錦司率いる白頭山遠征に京都府立大医学部学生として参加した。AACKの設立は三一年であるが、谷がその設立当時から会員であったか、白頭山遠征ではじめて会員になったのか、不明である。しかし親交のあった今西が谷をAACKに引き入れたことは確かであろう。

彼は浅井東一とともに医学班のメンバーであった。そして第一突撃隊の隊員に選ばれ、一月七日、白頭山の最高峰大正峰（二七四三

m）の厳冬期初登頂に成功した。AACKの歴史で、次に谷の名前がでるのは三七年のK2計画のときであるが、白頭山からK2計画にいたるAACKの動きの中で谷の名前は見あたらない。三七年に卒業し、医者としての研修に励んでいたと想像されるが、谷のヒマラヤにかけた情熱を知る資料はない。以後AACKの歴史から谷の名前は消えている。戦後京都府立医大からヒマラヤへ遠征がでたということを寡聞にしていけないが、もし遠征隊が出たら、谷は隊長として活躍していたに違いない。

五、おわりに

谷は寮歌が好きであったが、「雪よ岩よ」に対して「何でアルピニストが街に住めないのやろ、俺にはそんな考え方があわへん」と、この歌は歌わなかったときく（木村・山岳）谷は七〇年脳血栓症で倒れ、その後三回の発作があり、八六年の再発後は床につかれたまま、長い闘病生活を送った。元氣なときは多忙であり、山への情熱は持ち続けたが、穂高再訪はならなかった。

八八年、告別式の日には珍しく大雪が降った。生家を出た棺は山岳会の会員たちによつてしっかりと支えられていたという。ちなみに谷が亡くなったこの年は桑原武夫が亡くなった年でもある。

なお稿をまとめるに当たり、四手井靖彦さんから多くの資料と助言をいただき、また今西武奈太郎さんからは貴重なコメントをいた



右から谷博、同夫人千代野さん、今西錦司

だいた。厚く感謝する。なお四手井靖彦さんは、子供のない谷に、子供のようによく可愛がってもらったと懐古している。

参考文献

山崎他編…日本登山記録大成、三、一四卷、昭和五八年
木村…追悼谷博、山岳、Vol.83、157/160、一九八八
別冊太陽、日本山岳人物誌、一九九八

二〇〇六年八月 青海から西藏、雲南の旅の報告 青藏鉄道乗車記

齋藤惇生

二〇〇六年八月一日夜八時七分、定刻に我々が乗った二台のディーゼル機関車に牽引された一八輛編成の拉薩行の青藏鉄道列車は、西寧駅を発車した。夕闇のなか青海湖の北側を走る。黄色に熟れた小麦畑が見えていたが、一時間もすると暗くなった。一行は酒井敏明、

上尾庄一郎、笹谷哲也、笹谷アサミ、田中昌二郎、斎藤惇生の六人。七月一日の開通で中国内外の関心が高く、乗車切符の入手は困難だった。中国奥地旅行の達人笹谷が、早くから人脈をたよって手配したのだが、入手が確実になったのは出発三日前だった。二等の硬車寝台で六人は四車輛に分れていた。切符代は五二三元(約八五〇〇円)だった。

中国政府は一九八四年に西寧からゴルムドまでの八四一kmをまず開通させた。ゴルムドからラサまでの一一四二kmは一七年後の二〇〇一年に着工、砂漠・凍土帯、そして鉄道通過の世界最高地点になる五〇七二mの唐古拉(タンゴラ)峠を越える難工事を、六年間の短時日で国の威信をかけて完成させた。

硬車寝台は一室三段二列、中上段に上るのに梯子がない。下中段の足許の壁にはめこんだ金具を引出してステップにして上る。高齢者、弱者には不親切で危険な設備だ。枕許に

は酸素噴出口がある。硬車といっても床の布団の固さは適当で足もゆっくり伸ばせる。

二車輛に一ヶ所三個の洗面槽と壁に大きな鏡のついた清潔な洗面所がある。トイレは蹲踞式排泄物は航空機と同じように強力な吸込みで消える。飲用のお湯は常時出してインスタント食品や飲物を作るのに便利である。ごみは車掌が時々ポリ袋を持って集めに来る。列車の双方の入口の上に電光掲示板があつて、数分おきに外気温、高度、列車速度、通過駅名が、漢語、チベット語で表示される。速度はだいたい七〇〜九五kmだった。

硬車の乗客は我々ともう一人の日本人以外漢族の顔付で、三等の二人と三人掛座席車の乗客はほとんどチベット族の容貌だった。経済的な格差の現れと感じた。一等の軟車寝台は特別なルートがないとなかなか入手できないだろう。

翌二日七時ごろ起床、天候は高曇り、ちようどツアイダム盆地を通過。見渡すかぎり湿原、ラサに向う公路が並走している。八時一五分ゴルムド(二八〇〇m)に着く。二〇分停車する。外に出てインスタントラーメンを立食いする。ゴルムド(格爾木)は古くからの交通の要衝だが、駅から見える範囲では不愛想なコンクリートの建物だけの街である。

ゴルムドを出るとしよぼしよぼと草の生えた砂漠帯を走り、崑崙山脈の横断になる。鉄路から七〜八〇〇mぐらいの雪を被った山が続く。所々氷河も見た。一〇時二〇分トンネルを抜ける。時間的にみると地図にある崑崙

山口（山口は漢語で峠）を越したのだろう。

この後はココシリ（可可西里）の荒漠として樹木を見ない乾いた黄色の大地が続く。晴れて強い陽射しのなか同じ景色を見続けているとボーッとなってしまう。野生動物が見えると窓辺で歓声があがる。可可西里はチベットロバ、ガゼル、黄羊、ヤク、狼など野生動物が多く自然保護区になっている。

一二時前食堂車に行く。もう満席、笹谷が交渉してなんとか坐る。豚、ヤクの肉料理、淡水魚の空揚げのあんかけ、トマト卵炒め、野菜炒め、そしてビール。次々と手早く出ま上がってでてる。味は悪くない。宣伝では最高の中国料理を供給するとあるそうだがそれは無理だろう。

楚瑪尔河、沱沱河など長江源流のいくつかの河が乾いた大地を流れている。それ等を渡り一五時二〇分最高地点の駅唐古拉に着いた。砂漠状の広い高原で駅の表示板には五〇六八mと記されていた。一〇分ほどの停車だった。ここも車外に出れない。五〇〇〇mの高度だから出ないほうが安全だ。四〇〇〇mを越えるころから乗客の様子を見ていたが、あまり変わり無かった。しんどくて静かに寝ていた者もいたのだろうが、タンゴラに着いてからはしゃいでうろうろと写真を撮っている者が多かった。車輛はカナダの航空機メーカーの製造で気密になっている。三六四八mのラサと同じ程度の環境になるよう酸素を噴出するそうだ。

末梢動脈酸素飽和度 (SpO₂) を西寧、ゴルムド、タンゴラ、そしてラサ滞在の三日間、

中甸と測定してみた。少数例だが一九九〇年のシヤパンマ医学術登山隊の時の測定結果と違っていて興味深い。タンゴラでは三人の平均九〇%であった。シヤパンマ隊の時、航空機でラサに到着第一日目は平均八二%と報告されている。一週後の五〇〇〇mのBCで七九%だった。この事実は別に考察報告するが、我々以外の乗客も血中酸素飽和度の低下が少ないとすれば、この青蔵鉄道の高所低酸素対策は成功していると思う。

タンゴラを越すと西蔵に入る。安多（アムド）からは群青の湖水を湛えた錯那（ツォナ）を見ながら走る。岸辺に久しぶりに緑の草原とヤク、羊の群を見る。青海の乾いて荒れた大地の広がる光景と対照的だ。念青唐古拉（ネンチンタンゴラ）山脈の四五〇〇mの峠を越えて当雄（タムシュン）二〇時三〇分、この辺も草原にヤク、羊の放牧が多い。まもなく暗くなりまた夜行列車となった。

二二時三〇分、ラサ駅に着き二六時間の長い変化に富んだ列車の旅は終わった。プラットホームは大型ジープが走れるほど広い。駅の建物はポタラ宮と対比して設計されたそうだ。馬鹿でかいと感じるほどただ大きく威圧的である。

私が最後にラサを訪れたのは一九九二年のナムチャパロワ登山隊に参加した時だった。そのころ土埃の舞っていた道路は現在舗装され広くなっていて、新車らしい車が間をおかず走っている。新しい建物の売店、喫茶店、中国料理店などが増えている。看板は必ず上に漢字、下に西蔵字で表記されている。これ

は政府の指示によるものらしい。見上げるポタラ宮は外見には少しも変わらずそびえていた。五体投地の巡礼を見かけ、改めて西蔵にしていることを実感する。

一二日はダライラマの夏の離宮ノル布林カと博物館、一三日は文化大革命中完全に破壊され再建されたガンデン寺、大昭寺を見学、夜は四川料理の火鍋を食べた。だしに唐辛子と山椒を入れたスープに肉、魚、蛙、野菜、茸類をしゃぶしゃぶ風に煮て食べる。丁度松茸のシーズンだったので一皿三〇元（四五〇円）、沢山食べてみな大満足であった。

一四日は午前セラ寺、午後はポタラ宮へ行く。現在鉄道、空路で毎日二六〇〇人ほどがラサに到着する。ポタラ宮の入場者は一日二三〇〇人、見学時間は一時間と制限されている。一時間を越すと案内したガイドは次から入場できないそうだ。ラサに来たからにはほとんどの人がポタラ宮へ行きたがる。一〇〇元の入場券が二倍、三倍の闇値になっているらしい。のんびりと見学できた以前に比べて、この変り様は今のラサの変化の象徴と言えるだろう。

ラサ滞在中のSpO₂の変化を平均でみると八月一二日ラサ到着翌日朝八五%、一三日は八七%、一四日八五%、一五日は八八%であった。ラサ滞在が三日もするとほとんどが九〇〜九二%となった。自覚症状はないのだが上尾は八〇%前後、酒井は七〇%前後が続いた。列車内の環境はラサと同程度にしてあると聞いているが、五〇六八mのタンゴラで平均九〇%であった。ラサの酸素濃度より

条件を良くしてあるのかも知れない。ラサでの変化を見ると日々のCPIの%が上昇しているが高度順応の過程を示しているのだろう。

鉄道開通により西藏はどのようなように変貌していくだろうか。中国政府の西部大開発の政策の下に、西藏はインフラ整備などで恩恵を受けている。今度行つて驚いたのはラサ近郊のビニールハウスで野菜が作られ、現地産の野菜が食べれたことだった。聞くと四川省の農業者が西藏に来て、現地の人に土地を借り受けて作っているとのことだった。西藏の人たちは生活が近代化して便利になる期待と、漢族の流入がいよいよ多くなり、西藏人のこれまでの生活習慣が脅かされる不安の両面があるように思った。

一五日ラサを発ち中甸へ飛んだ。最近開設された航空路である。ナムチャバロワの上空を飛ぶのだが雲で見えなかった。中甸から徳欽、飛来寺付近の立ち並ぶチョルテンや店、ホテル多くの旅行者に驚きながら慰霊碑に参詣した。遅く明永村に到着、一応のベッドと水洗トイレのある民宿に入る。隣りは新しい民宿建設中まだまだ大工が働いていた。道路が改修舗装されたため中甸から一日で明永入りが可能になったのである。

翌一六日、明永氷河へお参りに行く。階段の起点まで馬に乗る。左岸に丁寧に作られた鉄製の階段を登り展望台に着いた。柱にチベットのカタを巻き、井上以下一人一人の隊員の顔を思い浮かべた。下りに村長に会った。遺体捜索の協力、小林尚礼が世話になったことに礼を述べた。

明永で昼食後出発して中甸に行き一泊する。途中暗くなってから三〜四人は乗った農業小型トラクターに何台も会う、みな松茸とりに行つた帰りらしい。この辺の松茸は中甸の別名香格里拉(シャングリラ)産となつて日本で売られている。

中甸から昆明、北京に飛び一泊、一八日帰国した。今回のこの旅は、切符、車、宿泊まで一切が笹谷の手配だった。全くいたれり、つくせりであった。感謝して報告を終る。

第十回「岡山のを登る会」 (日名倉山・三室山の山行記録)

潮崎安弘

秋の恒例、岡山の山を登る会は今年で第十回、例年より十日遅れで昨年十一月十一日及び十二日に開催された。今年も広範な地域から参加したメンバーは多士済々、この会では初めての雪中登山、一人の落伍者もなく全員目的の山頂を極める事が出来た。

参加者は、京都・滋賀から酒井(敬称略、以下同じ)・左右田・岩坪夫妻・川嶋・上尾・宝田に初参加の中野、大阪・兵庫から寺本・青野夫妻・松井・新井夫妻・川崎・潮崎・高野に井関の他、横須賀からは奥村夫妻、米子から藪内、広島から内山に加え、何と今年は米国から川瀬の特別参加もあつて総勢二十三名の大部隊となつた。



挑む山は、第一日目に足馴しとして日名倉山(一〇四七米)、二日目の本番は三室山(二三五八米)、いずれも県境尾根に連なつて天候さえ良ければ山頂からの眺望が素晴らしい山である。岡山への行き帰りは今年もマイカー自粛、公共交通利用の原則を守り、智頭急行(JR山陽線上郡と因美線智頭を結ぶ三セク線)大原駅集合とした。

かくして第一日午前十一時過ぎ、先ず智頭方面から藪内が到着、数分遅く上郡側から大勢が到着。一年振りの再会の挨拶もそこそこに専用バスで日名倉山に向かう。朝降つて

いた雨も曇り空に回復したが、山の天気や如何にと仰ぎ見ると雲の中。今日は山頂からの眺望は無理と覚悟した。

日名倉山はこの会の第二回目にも登っているが、この山、尾根続きの高峰後山に近い山ながら八合目辺りにあるベルピール自然公園まで車で上られる。この公園には集会ホールと鐘楼があつて、毎日正午に打ち鳴らされるベルの音は麓の西栗倉村一帯ののどかな雰囲気作りに一役買っている。我々の車は霧の中、約三十分でここに到着、鐘楼で定時のベルが打ち鳴らされるのを真近で聞いた後、山登りを開始するが、一帯灰色の霧が晴れず山頂は何も見えない。恒例のヤッホーと写真撮影で直ちに下山。帰路の途中にある現代玩具館・オルゴール夢館に立寄つた後、今夜の宿場あわくら温泉に到着した時には日が暮れていた。温泉入浴後、夜の懇親会では寺本リーダーの発案で、梅里雪山登山隊の一人、船原尚武くんのご両親が近くにお住みであつたのでご招待し、最近行かれた梅里雪山麓の明水村の近況報告などを伺つた後、ご両親共々歓談に入つた。

翌日、夜半に降つた雨は止んだが雲が飛びどうやら冬型の気圧配置で雪模様。午後からの回復を期待して昨日と同じ専用バスで出発。道は北へ、峠を越して兵庫側、千種川筋を下つて再び支流を遡り、三室山麓の青少年野外活動センターまで三十分の走り。天気は霧雨、気温は低い。身を固めて登山開始だが、車道の歩き一時間で登山口に到着。その後、谷道はやがて急斜面のつづら折りの急

坂となり息が切れる。麓の霧雨は霏になつたが高度をあげるに従い何時しか雪、それも一時的には吹雪に変わり地上は白一色に急変した。

南面から山頂に辿り着く尾根はさぞや強風と予想したが意外と風は弱まり、寒さに耐えながら雪一面の山頂に全員揃つて着いたのは登山口から二時間後のお昼前。雪は小降りとなつたが昨日と同じく周辺の眺望は望むべくも無い。この寒さでは昼食も諦め、ヤッホーと写真撮影のみで下山。

下りは、大人数のため岩場・鎖場通過で意外と時間を要したので、登山口も休まず一気に駆け下つた結果、山頂から二時間で下車地点に到着、漸く昼食にありつけたのは午後二時であつた。何時しか雪空も晴れふと見れば周辺一帯は紅葉の真つ盛り、美の極致のような山並みの中に我々は居た。

再び迎えの車で県境の峠を越して岡山県側のあわくら温泉に戻り入浴。十回目にして始めて予期せざる積雪登山であつたが、冷えた体で浸かる温泉は格別であつた。身だしなみを整えて大広間で暫しの間の宴会と懇談。時間が来て大原駅へ車で移動後解散。南へ北へと夫々帰途に着いた。

今回の世話役は、例年通り寺本リーダーを中心に川崎・潮崎幹事が担当。高村幹事は急遽海外出張となつたので上尾氏に代理幹事をお願いした。その労に感謝の意を表したい。

最後に岡山の山に登る会の今後について一言。冒頭に記したようにこの会も岡山の山を

登り続けて既に十年。当初少人数で始まつたこの会も年を追う毎に人員が増え、今や広い地域の方々から期待される秋の恒例行事となつた。これは、その間一貫してお世話戴いた寺本リーダーと川崎幹事は勿論、これを支えられた参加の方々のお蔭と言えよう。しかしこの十年を契機として寺本・川崎氏から後進に道を譲りたいとの意向が出され、周辺もご異存がない様子。一方、岡山の山を登り続けた結果、公共交通利用を原則に適当な時間で登れる山はほぼ登り尽くされた感も有る。

残された幹事としては、ここに寺本・川崎氏の長年のご苦勞に敬意と謝意を表する共に、この歴史を絶やす事無く新たな展開を図る所存なので今秋も多数、更に新たな方々のご参加をお願いするものである。

(二〇〇七・一一・二十一)

雲南・東蔵考察団道中記(上)

田中昌二郎

二〇〇四年秋、黄河源流・アムネマチン山麓を訪ねたその足で昌都(チャムド)に入り、未踏峰が連なる怒河(サルウィン河)支流の山城をのぞき見たことで、東蔵なかんずく川蔵南路と北路の中間地帯の魅力に打たれた。またまた二〇〇六年秋に、笹谷哲也さん総指揮のもとで魅力的なプランが練られていることを聞き、迷わず手を挙げた。梅里雪山にお



写真1. マン・ツォ湖畔からのドジツェンザ (5662 m)



写真2. ドジツェンザ (5662 m) のアップ

参りして後北上、川蔵南路をたどる道すがら、拉古、米堆の氷河を訪ね、波密の谷に入り、又、通麦から記録の少ない易貢蔵布にも分け入り、その後八松措から更に山深く分け入るう、そして公路に戻りナムチャバルワ、ギャラペリを拜んで拉薩に入城する。一部は更に川南地区の古チベットの聖地を巡ろうという中身の濃い計画である。参加メンバーは笹谷哲也リーダーの下、寺本巖、福本昌弘、原田道雄、松井千秋、伊藤寿男、田中昌二郎と、雲南医学調査旅行中の松林公蔵、奥宮清人、石根昌幸、木村秀生の医学隊が、飛来寺にて合流、総勢一一名である。

二〇〇六年一〇月九日 関空―北京―昆明

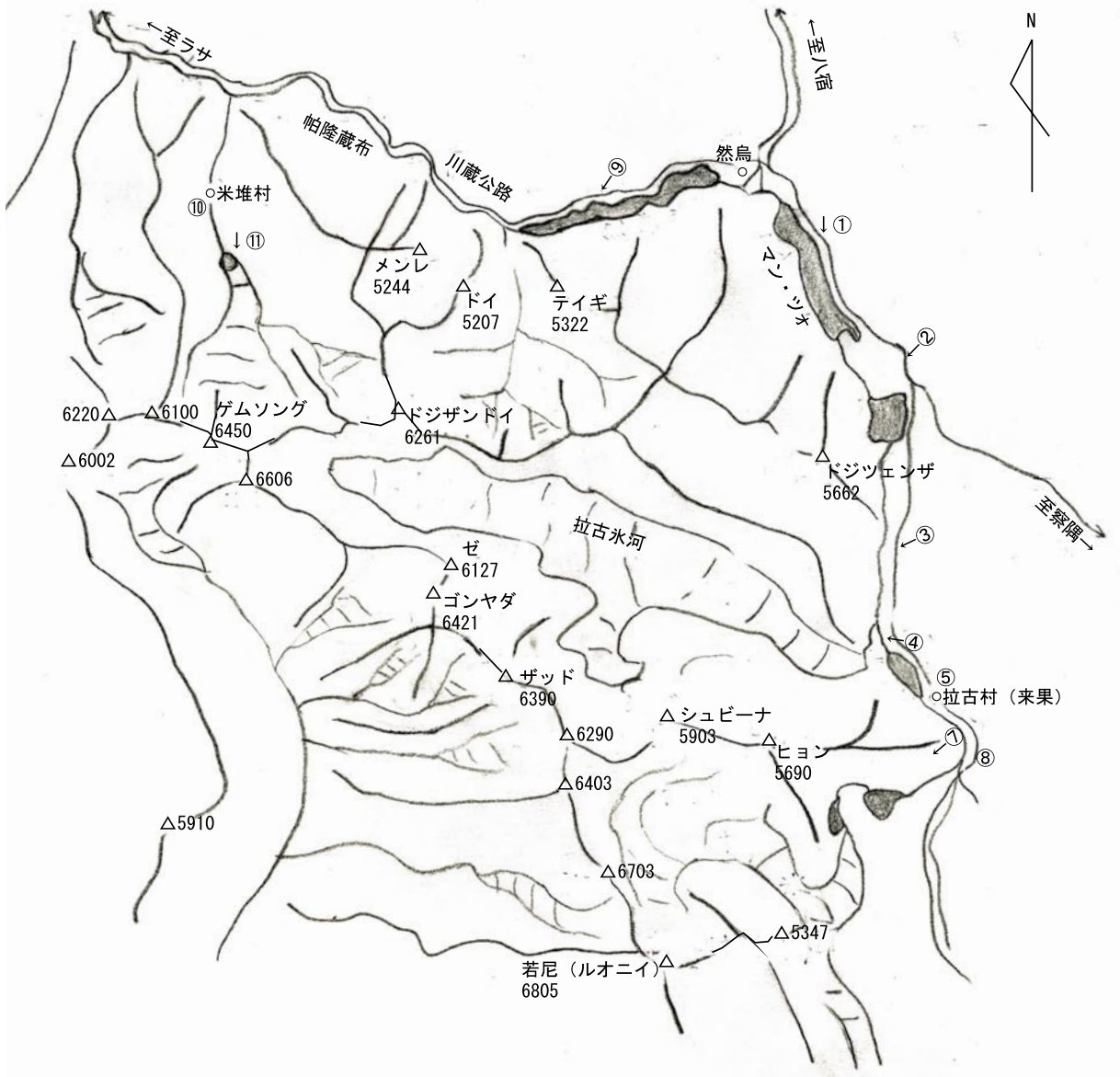
一〇月一日 昆明―香格里拉(シャングリラ・旧名中甸)

お馴染みのガイドの郭健文さん、運転手の陳さん、ジェジェ、アニ・ラマ、チュウデンさんの出迎えをうけ、四駆四台の大部隊で長途の旅に出発。金紗江の湾曲部を眺め、四二九二mの白馬山口に上って指呼の間に未踏の白馬雪山五六四〇mを眺める。こんな近ところ立派な未踏峰が残っているのは勿体無い。徳欽の街は通過し一路飛来寺展望台へ急ぐ。心配していたが梅里雪山連山が湧き上がる雲の中から顔を見せてくれた。風にはためく祈禱旗の向こうに、ジャワリングが奇怪に裂けた岩の屏風を立てている。主峰カワカブも拝めた、これでこの旅の目標の五〇%

は果たしたと目頭を熱くする先輩に感激する。夕陽に輝く峻峰メツモ、カワカブに思いを残しつつメコン河の断崖を下り、とっぷりと暮れた明永村の諾布桑牧客棧(民宿)の向かいに新築された崗堅賓館(Gangjian Hotel)に投宿。清潔且つ機能的なオープンキッチンが素晴らしい。

一〇月二日 曇り時々小雨 旧館の屋上角にはカワカブに向かって朝のお祈りの煙が上っている。八時四五分、乗馬にて明永氷川(氷河)を登るが、鞍がずれて大苦戦する人もいる。(馬代は八五元が一二〇元に値上がりしていた。)太子廟で灯明をあげ、小雨の中、氷河展望階段を登って、雲に隠れたカワカブ山頂に向かいカタをささげて礼拝。帰途は途中から馬を捨て、川沿いの道を下った。快適であった。昼食後飛来寺の民宿・山行者部落に引返すと、医学隊の松林、奥宮、石根、木村の諸氏はもう到着していて、東蔵考察団勢揃いの白酒(パイチュウ)宴会となる。松茸がどんどん出る。

一〇月二日 七時起床、八時朝食。徒歩にて古寺・飛来寺に参拝。こちらの護摩木に相当する檜の葉を焚いて、これからの道中の安全を祈願する。再び展望台に戻ると、黒髪に赤い珊瑚玉を飾った巡礼姿の若いチベット娘が、これからカワカブ一周の厳しい巡礼に出るのだろう、一心に祈りをささげている。持ち物とて粗末な袋一つを背負っただけである。我々も川蔵公路巡礼の行路安全を再度カ



「拉古村を囲む山々」概念図

(注) この図は松本健夫氏作成のカンリガクボ山群の概念図を下敷きにして作成した。図中に番号と矢印を記した。これは写真撮影場所を表しており、矢印は撮影方角を示している。ご参照ください。

ワカブに祈って、午前一時、陳さん運転のランクルを先頭に、いざ出発。梅里水ではワカブ巡礼を終えた一団に会う。現代化していて、迎えのマイクロバスが待っていた。塩井の製塩見学に悪路をメコン川目指して下る。赤紫色の急峻なメコン川両岸に、木材を組んで土を盛り幾百となく塩田を作り、塩水をくみ上げ天火で乾かし、その富は東チベットで一大勢力を築いた由。ところがもう日照時間が短い秋になって作業はしておらず見学できなかつたが、運転手のアニ・ラマが塩田の下へ案内してくれて、塩田からもれて垂れ下がって固まった塩の棒を舐ると、苦汁の利いたチベットの塩を味わえた。当隊の料理自慢のシエフたちは、塩井の町で現地特製の塩を買い込んだ。帰国後各々腕を振るい蘆蓄を傾けたことだろう。

今夜の泊まりはメコン河右岸の曲孜卡温泉である。一昨年はギンギシきしむ古い木製の吊橋を下車し徒歩



写真3. ヒヨン (5690 m)、シュビーナ (5903 m)、ザッド (6390 m)

で渡ったが、なんと鉄筋コンクリートの橋ができていて、二〇元の通行料を徴収された。フルスピードでわたって、避暑地のコテージ風の宿に到着。早速二〇m×二五m程の温泉プールに入る。水泳パンツ二〇元。結構な湯加減で、メコン河畔で水泳大会兼入浴となった。高度も二二〇〇mほどに下がっていて、寝具も清潔でぐっすり安眠。

一〇月一三日 出発して直ぐ真っ赤な大吊橋にいたる。断層地帯の谷をうねってつけられていた旧道は、もう半分崩れた土砂に埋まっていて、メコン川の水面まで二・三〇〇mで切れ落ちている。わずかの平地を見つけて大麦の段々畑とチベット民家が豆粒のよう



写真4. 拉古氷河の雄峰。右からドジ・サンドイ (6260 m)、奥中央は6606 m峰か？ 左へ ゼ (6127 m)、ゴンヤダ (6423 m)

に散らばっている。一昨年、あの道を通ったかと思うとぞつとする。今は谷を一跨ぎ。雪の紅拉山口 (四〇三五m) を越えて芒康 (高度三七〇〇m) の康盛賓館で昼食。街には「招聘服務員」の張り紙もある。「年令一八〜二五歳、五官端正、工作経験者、行資面談、茶馬古道酒家」とあった。こんな山奥でも人手不足か？

昼食後いよいよ厳しい登りにかかる。紅色の紅葉がないのが惜しいが、黄葉と針葉樹の緑の二色に彩られた樹林帯の眺めを楽しんでとおもったら、ヤクの群れが草を食む高原地帯となり、更に雪が降りしきって、あたり一面真っ白の東达拉 (トンダ・ラ、公称標高五〇〇八mだが、二〇〇四年、私の



写真5. 来果村小学校の先生と生徒たち (撮影：木村秀生)

スントの高度計では四八六五mを表示、今回も四八九〇mを表示した。) を越えて左貢 (三七九〇m) に着く。熟練の運転手はこれ位の雪では動じないのが頼もしい。左貢大酒店に投宿。

全員体調良好で白酒がすすむ。これも笹谷哲也リーダーの余裕を持った旅程のお陰か。初めての高度には泊まらないという鉄則を守り、初日には飛来寺には泊まらず、少々遅くなっても明永村に降りて泊まった。標高五〇〇〇m近い東达拉越えに備えては、前日は半日行程にとどめ、標高二二〇〇mほどの温泉に降りて英気を養うという高年メンバーへの配慮が行き届いていた。



写真7. 若尼（ルオニー）峰かと思ったが前衛峰

一〇月一四日 邦達（三九六〇m）にて左折、昌都（チャムド）、西寧へ向かう二一四公路と別れ、成都からの三一八公路・川蔵公路へ入る。四四六五mの峠を越えて棚田の美しい村・同尼村（三五〇〇m）に下り、更に怒河畔（二六三三五m）の川幅五〜六mに狭まったゴルジュ地帯にまで下る。渡河地点には衛兵詰め所があったが衛兵は立っていないかった。怒河（サルウイン河）の水の色はメコン川（瀾滄江）の鉄錆色ではなく、青緑色に美しい。八宿（三一七五m）にて昼食。ヤクのセンマイ（胃）が美味い。

左右の雪を頂く峰を眺めながら高原地帯をフルスピードで駆け抜けるとサッと視界が広がり、行く手に岩と雪を頂いた尖った峰が現れ歓声がる。もうカンリガルボ山群に来て居るのだろう。程なく然烏（ラウー・三八二〇m）橋を渡り、湖畔のバンガロー風宿舎に荷を解く。暫し然烏湖畔の卓で対岸の黄葉と山々を眺めながら安着祝いの啤酒（ビール）を飲み、時のたつのを忘れる。がハッと気づき、旧ソ連製の二〇万の地形図と、横断山脈研究会でAACKK会員松本徑夫氏からいただいた資料、写真（JAC福岡支部隊が二次にわたり調査されたもの）とを取り出して同定にかかった。と目の前の山は、テイギ（五三二二m）、ドイ（五二〇七m）、メンレ（五二四六m）の三山であった。明日はこの資料を持って拉古氷河を訪ね、カンリガルボ山群の未踏の山々を探訪する。



写真8. チンコー麦の脱穀風景

一〇月一五日 八時朝食、八時三〇分出發。直ぐに目の前に、中央に三角錐の特徴のある山容のドジ・ツェンザ（五六六二m）とその西の五六三〇m峰が現れる。小規模な水力発電所も見える。道は大きくうねって車は大波に揺られているようだ。マン・ツォ、ヤン・ツォの二つの湖畔を進むとヨーロッパ人グループ、中国人グループの車もやって来る。さらに湖畔のオフロード、湖岸の水の中を勢いよく走破して拉古村に着く。快晴。この乾燥した高所の刺すように強い陽射しを避けるには、二〇〇四年玉樹で買った厚手のチベタン・カウボーイハットがピッタリだ。眼前にヒヨン（五六九九m）、シュビーナ（五九〇三



写真9. 然烏湖畔からのメンレ(5248m)、ドイ(5207m)、テイギ(5322m) 右から

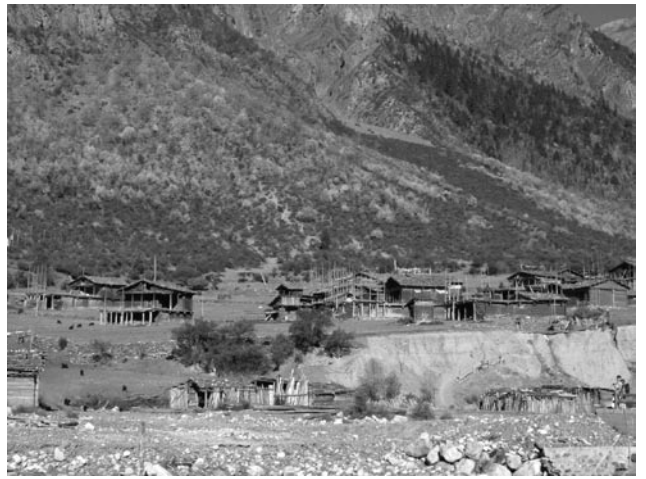


写真 10. 米堆村

m)、頂上部が半月形にえぐれた純白のザツド(六三九〇m)が連なっている。圧巻なり。氷河湖・拉古湖(湖面の標高三七八〇m)には氷河から流れ落ちた氷が漂っている。その北方、平坦な拉古氷河の右岸には、怪異な岩と氷のゴンヤダ(六四二二m)、ゼ(六一二七m)が望めるではないか!最奥部の錐のようにとがったのはドジ・ザンドイ(六二八〇m)だろうか。未踏峰のオンパレードである。

村では今まさにチンコー麦の脱穀作業の真最中で、平屋根の上に日本の稲こきの様な機械を据え、一、二、三人の男女が共同で作業をしている。脱穀された麦藁は束ね稲木に干されている。まったくのどかな桃源郷の秋というところである。



写真 11. 米堆氷河源頭のゲムソング(6450m)

然烏鎮来果村初級小学校の中庭を借りてインスタントラーメンの昼食をとった後、銘々徒歩で村内をもう少し奥へと散歩する。田中はシルバートートル・カンリガルボ隊報告記事の掲載された雑誌「山と溪谷」の切抜きを持参していた。ところが村の少年がその写真の中に村の少女や親戚の姿を認め、この娘はダシーだ!このおばさんはゲジュだ!ウジードと大興奮し、これを欲しいとねだられたが、コピーを撮ってなかったので、鉛をわたしてようやく諦めてもらった。

奥へ進むと阿札氷河の方向に若尼峰か?と思われる雰囲気のある峰を発見、シャッターを切る。が、帰国後平井一正さんに同定願ったところ、残念ながら五〇〇〇m台の前衛峰

とのことであった。来果村小学校の若い女の先生と生徒たち二〇人あまりと全員で記念撮影し、郭さんらが何がしかの寄附をして拉古氷河を後にした。

一〇月一六日 今日行程が長いので、六時二〇分起床、七時三〇分朝食後出発。しばらく然烏湖南岸のテイギ、ドイ、メンレを眺めながら西行、帕隆藏布の峡谷美と朝日に輝く黄葉を楽しむうち、「中国最美氷川 米堆氷川」の大きな門の前へ出た。この門をくぐって米堆村へ進むが、村の手前で道が崩れていて下車。河岸段丘左岸の上に三〇戸あまりの木造家屋が肩を寄せ合うように建っている米堆の村を過ぎると、広く明るい谷の奥一杯に氷の壁をめぐらした真つ白なゲムソング(六四五〇m)が現れた。鋭いナイフリッジの奥に鋭い三角形の頂上が見えた。氷壁があまりに急峻なため頂上手前で崩れ落ちたのか、逆三角形に黒い岩が大きな面積で露出している。暫し呆然と見とれていた。広葉樹の林を抜けると数戸の家屋が点在している。良く整理整頓されていかにも清潔且つ付まいが上等で、周りの風景とあいまって桃源郷を思わす。最初の氷河湖前で記念撮影する。谷右岸奥に錐のように鋭い氷の峰の頂上部がのぞいている。これは昨日、拉古氷河の左岸奥に見た鋭峰だろうか?医学隊の若者と昨年崑崙で活躍された伊藤さんは、少しでも上部の隠れた部分を見ようと、走らなばかりのスปีドで氷河の奥の氷河湖まで分け入った。

米堆氷川を後にし、また帕隆藏布の峡谷を

西行する。街道沿いから五〇〇m峰のオンパレードである。松本さんの写真、資料と首引きで、車中から右岸のニャンポ・トレ

(五四二四m)、左岸の三人姉妹と注釈のついたピラミッドなボム・ベソン(五七四〇m)、前山のV字の谷間にジガEとジガW(五六四三m)、リスン・ガンポ(五四〇〇m)など次々と現れて大忙し。このあたりから空模様が変わり雲が降りてきて、多くの山の頂上部が隠れてしまったのは残念だった。その後大岩壁にかかる一条の滝や紅葉、黄葉をめでながら波蜜(二六四五m)の衆興賓館に着く。部屋は広く、設備も全く日本の一流ホテルと同じ程度、水まわりもしっかりしており、シートも真っ白。夕食は外の食堂でとる。豚の舌は特に美味で、今日もまた白酒宴会となる。

明日は待望の波蜜の谷に入るのだが天気が気掛かりだ。(上)完

付記

概念図「拉古村を囲む山々」は、松本徭夫氏が二〇〇一年と二〇〇二年にJAC福岡支部踏査隊として調査された資料を下敷きとして作成いたしました。ただし松本氏から、その後両度に亘る踏査により不明な箇所、訂正箇所が判明し、このたび、今までの調査結果を纏めた集大成版の発行の運びとなったとのお知らせをいただきました。

書名

「ヒマラヤの東 崗日嘎布(カンリガルボ) 山群 踏査と探険史」

編著

松本徭夫(外二名著)

出版社 權歌(とうか) 書房(福岡市)
総ページ数は八〇〇ページ余、五月中に発行予定とのことであります。

東チベット山村の住居

松井千秋

旅のはじまり

雲南・東蔵考察団に参加して、初めてチベットを訪れた。世界の建築史上、類のない特異な構法による壮大なポタラ宮を、いずれは自らの目で確かめたいと思っただけだが、今回、特にチベットの建築を調べたいと思っただけで参加したわけではなかった。笹谷哲也氏を団長とするパーティに参加して、山岳部の先輩、同輩、後輩ら昔の仲間と氷河をいざく山々を眺めるのが私の旅の目的であった。

二〇〇六年一〇月一〇日、シャングリラ(雲南省)を仲間七名、四輪駆動車四台で出発した。一〇月一日、飛來寺(雲南省)で松林公蔵氏ら四名の医学調査隊と合流し、総員一名で旅を続け、一〇月二日ラサに到着した。総距離、約二二〇〇kmを走行したが、川藏南路の公道から離れて、いくつかの谷に入り、氷河に近づいて山々をながめた。

谷を登ると必ず氷河に近い山麓に村落があり、人々の暮らす住居があった。家の階数は一、二階で、構造は木造であり、また、木造と石造を混合した形式のものがあつた。木造

の形式は、木材を横に積み上げて壁を造る丸太組構法(いわゆるログハウス、日本の校倉造)である。木材の断面形状は、円形(丸太)、正方形、長方形(板状)であつた。二階建では、一階が石積壁、二階がログによる木造壁である。

ログハウスの源流は、北欧などヨーロッパであることが一般に知られており、ログハウスがチベットにあることを全く知らなかった私は大変驚いた。ここでは、チベット山村のログハウスを紹介すると共に、日本の校倉造との関係について多少考察も加えたい。

自然豊かな東チベット

今度の旅に出るまでのチベットの自然に対する私のイメージは、一般の人と同じく荒涼とした高地であつた。しかし、団長の選んだラサへのコースは、森林、峡谷、溪流の多い自然豊かな地帯で、上高地のスケールを大きくしたような風景が各地にあり、世界の中でもこれほどの景勝地は無いと思われるほどであつた。コースの大部分を占めるニンティ(林芝)地区は、チベット自治区全体の森林被覆率が三・五%であるのに対して、四六・三%であることを後で知った(写真一)(文献二)。森林帯が発達したのは、このあたりの標高が三〇〇〇m程で割合低く、モンスーン期にヤルンツァンポ大峡谷を通って、インド洋から温かい空気が北上することが理由に挙げられている(文献一、二)。

樹林は、松、杉などの針葉樹、それにくぬぎなどの広葉樹である。ガイドのカクさん(チ



写真1 林芝地区の森林

ベット人)から聞いたところ、不思議なことに松茸は松の林ではなく、七月頃から、くぬぎ(日本のくぬぎの細長い葉形と異なり、長さ4cmくらいの広楕円形)の林に生えるとのことであった。全山、くぬぎに覆われた山もあつた。一〇月一七日、ポメ(波密)から西に進み、公道を離れてポータゼンブの川沿いを上流に向かったが、途中、川岸に大きな製材所があり、更にその奥地で、その製材所に向かう松の巨木を積んだトラックに出会つた(写真二)。この地には、豊かな森林資源があり、木材が最も利用しやすい建築材料であることをうかがわせた。



写真2 巨木を運ぶトラック(図1の④)

山村の丸太組構法

わが国では、木材を横に積んだ壁によつて建物を作る構法を、校倉造(あぜくらづくり)とか井籠組(せいろうぐみ)とかいっている。井籠組は木材を横に井桁に組むが、隅部で直交する材のレベルが同一である点で校倉造と異なる。チベットで井籠組は見なかったが、欧米からわが国に入ってきたログハウスといわれる構法も含めて、ここでは「丸太組構法」と呼ぶことにする。この用語は、北欧や北米からこの構法の製品が輸入されるようになり、この特殊な構法をわが国で一般化するのために、建設省が昭和六一年に公布した、

この構法の技術的基準を示す告示に用いられたのが始めである。「丸太組」といっても材の断面は円形には限定されていない。ここでは、断面形を区別するときには、丸ログ、角ログ、板ログと呼ぶことにする。

今度の旅のラサまでのコースと、私達が訪れた山村の位置の略図を図一に示している。最初に丸太組構法を見たのは、旅の二日目、梅里雪山に近い飛来寺で宿泊した山行者部落という宿のそばであつた。小さな丸ログで、今は使われていないのか道のわきにひっそりと建つていた(写真三)。この時は、こんなところにログがあるのかという程度で、この構法がチベット山村で一般的に使われていることにまったく思い到らなかつた。

旅の五日目、ラウォ(然鳥)に到り、三八〇〇mの湖畔に宿泊した。一〇月一日、宿から湖沿いに南下して奥地に入った。この日は快晴で、青空に輝く五〇〇〇〜六〇〇〇m級の山々を眺めながら進んだ。平井一正氏らが試登したルオニイ(六八〇五m)が見えるはずだと、田中昌二郎氏に教えられ、南西方向の山々を遠望した。昼ごろ来果村(四〇〇〇m)に到着して、ここで初めて、東チベット山村の住居などの建物が丸太組構法で建てられていることを知つた(写真四、五、図一の①)。昼食は、来果村初級小学校の石積壁で囲まれた校庭を使わせてもらったが、校庭の一隅にある職員室は写真四から分かるように角ログである。写真五は、丸ログで、最初は住居として作られたのかどうかわからないが、今は倉庫として使われている

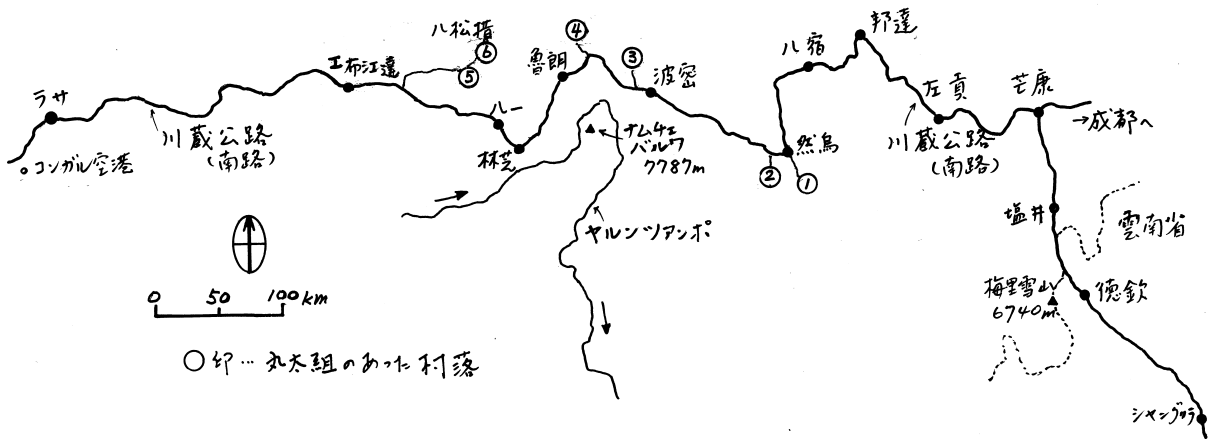


図1 シャングリラからラサへのルート



写真3 飛来寺で見た丸ログの小屋

ようである。
 一〇月一六日は、ラウオを出発し、公道から離れて南下し、米推氷河の末端まで入ったが、この奥地の村で、改めて丸太組構法がこの土地固有のものであることを確信した(写真六、七、図一の②)。小川にかかる水車小屋や流れを利用して廻すマニ車のおおいも丸ログで作られていた。写真六は住居で、左側は角ログ、右側は丸ログである。ログの天井は二階の床となっていて、作業場や物置として使われている。写真七は、新・旧のログで右側は新しい板ログ、左側の古いログでは、屋上で作業している人が見える。



写真4 来古村の角ログの小学校職員室(図1の①)

このような丸太組構法が、この地域で使われているのは、建材として針葉樹が容易に入手出来ることのほかに、チベット・雲南は地震活動が盛んな地域であり、柱を鉛直に建て、梁を水平に架ける骨組構造に比べて、木材を水平に積む壁式構造が耐震性に優れていることを、経験的に学んできたことによるのではないかと思う。

木と石の建築
 旅の後半になって訪れた山村で、平屋の丸太組とは異なる二階建の木と石による建物を見た(図一の③、⑤、⑥)。これらの二階建



写真5 来果村の丸ログの倉庫 (図1の①)

の住居の特徴は、一階が自然の石を用いた石積壁、二階が丸太組で板ログが用いられている(写真八、図一の⑤)。二階の荷重の一部は一階の石積壁に、残りは二階の床下に配置された木造の梁と柱で支えられている。一階は物置などに使われ、二階が生活の場で、石積壁に設けられた入口から一階に入り、木造の階段を上って二階に入るようになっていゝる。二階の木造の床組には炉が設けられ、一日中新が焚かれ、食物の煮炊きはこの炉で行われる。建物の右側に突出している部分は、便所で、放し飼いにされたブタが放出された便を直ぐに処分する。空気が乾燥しているた



写真6 角ログと丸ログの住居 (図1の②)

めか、近くに行っても臭いは残っていない。写真九は道沿いに建っていた建物で、構造的には写真八と同じであるが、最近建てられたようである。一階の壁はコンクリートブロックのように見えるが、これも自然石(長方形に成形)である。二階は板ログである。屋根はよく見えないが、左隣の建物と同じ薄い鋼板(トタン)で葺かれている。車で公路を走っている時も、道沿いに、同一規格の平屋のログあるいは石積の新住宅群をたびたび見かけたが、それらの屋根も赤や青など彩色したトタンが用いられていた。最近の中国の鉄の生産量は世界一で、日本の三倍以上、今



写真7 新・旧のログによる住居 (図1の②)

では年間四億トンに近づいている。余裕ができてきて、チベットの奥地でも木の屋根に代わる新材として普及してきたのだろう。

校倉造との関係

チベットの丸太組構法による多様な建築物の存在は、私に取っては予想外のことだったので、帰国して少し調べてみた。日本建築学会の東洋建築史図集(一九九五年出版)には、チベットの木造住居の写真も図面もなかったが、ナシ族の「井幹」式住居(雲南永寧)の図面が紹介されていた。その解説には「雲南・チベット・新疆などでこの構法が利用さ



写真 8 石積壁と板ログによる住居 (図 1 の⑤)

れており、歴史的には「史記」考武本記に校倉を指す「井幹楼」の名が見え、また、雲南の石寨山出土貯貝器に描かれた糧倉の図や家屋模型がこの構法によることから、その伝統は少なくとも漢代までさかのぼる。』と書かれている。ナシ族の「井幹」式住居は、医学調査隊の奥宮清人氏から、麗江北方の星明村で、自ら撮影された写真を帰国後いただいており、その建物には建築学会の図集の断面と同じ丸ログ(多少加工されているがほぼ円形)が用いられている。

わが国では、古代律令制度において、租税である稲穀を収納する正倉建築が奈良時代から平安時代にかけて、中央および地方の各地に建てられた。税の収支決算を記録した正税帳には、倉の名称、形式、倉の寸法などが書かれている。それによると倉の形式として、丸木倉、甲倉、板倉などが存在した。丸木倉は、和泉監正税帳(七三七年)に初めて見られ、伐採したままの木を用いた倉といわれる。この形式は初期に多く、後期には減少する。甲倉は、諸説があるが、東大寺正倉院の材の断面(三角形、正しくは三角形の尖端に面が取ってあるので六角形)のように、丸太を加工した多角形の断面と考えられている。板倉は、①厚板(長方形断面)を校倉に組んだ構



写真 9 石積壁と板ログによる家屋 (波密の西)

造、②鉛直の柱の溝に厚板を横はめ式に落としこんだ構造、の二説がある。文献三の富山博氏は、記録された板倉の面積が大きいことから、柱の本数を増やすことで面積が大きく取れる②を表していると考えている。①については、板あぜ倉の言葉も使われていたもので、やはり②が正しいとしている。チベットのログには板あぜ倉の壁と横はめ式の壁を混用した住居もあったが、この文では、板あぜ倉も板倉と表わすことにする。そのように考えると、律令時代のわが国の正倉建築に用いられていた、丸木倉、甲倉、板倉は全て、現代のチベットに存在していることになる。



写真 10 板倉による春日大社社宝殿(奈良市)



写真 11 ラサのポタラ宮

わが国では、律令時代の穀倉は残っていないが、校倉造の宝庫や経庫が東大寺、唐招提寺、教王護国寺などに残されている。私の調べた範囲では、春日大社本板倉、春日大社本宝库（写真一〇）、伊勢神宮外宮御饗殿は板倉で作られている。春日大社の二つの板倉の建物の断面の寸法は、私が測ったところ、幅×高さは（四・六〇）cm×（二五・三五）cmであった。チベットで計った板口の断面は（幅五・七）cm×（長さ二〇）cmとほぼ日本と同じような形状寸法であった。

静岡の登呂遺跡では弥生時代の住居跡が発

掘され、竪穴式住居と高床家屋が復元されている。高床家屋は稲倉と考えられており、出土した材端が切り込み加工された板状木片を参考に、板材を用いた井筒式の構造で復元されている。このような構造が発展して板倉につながっていったのかも知れない。

三角形あるいは六角形の断面材による校倉造は、今のところ日本以外では確認されておらず、日本独特の形状といわれている。この起源が日本なのか、あるいは丸太組構法が国外からもたらされて発展し、この形状が生まれたのかは、現時点では明らかになっていない。東アジアにおける丸太組構法は、前記した漢時代の雲南出土の銅器に描かれた図以外にも、高句麗（吉林省）で発見された五世紀の墓の壁画に、高床の基盤に立つ二つの丸太組に寄棟の屋根がかかった画が描かれていた。これらのことから、わが国の丸太組構法は北方あるいは雲南などの南方から伝えられたとの仮説も有力である（文献三三）。南方の場合、チベットのログは何らかのかかわりを持ったのであろうか。それにしても、チベットでは板倉は現在まで民家に用いられてきており、わが国では、宝殿など重要な建物に用いられていたことは対称的で興味深い。これからも折にふれて情報を集め、チベットとわが国の丸太組構法とのかかわりについて考えていきたい。

感動は前進

今回の旅は、登山という共通の目的ではなく、参加者はそれぞれ自分の思いで考察団に

加わった。参加者は、それぞれ個性あふれる人々であった。原田道雄さんは、旅を通じて同室のことが多かったので、夕食後、原田さんがどこからか入手してきた酒で夜ごと歓談した。それには、酒と議論の好きな寺本巖さん、松林さんが常に加わった。寺本さんからは、先端的な科学技術について、松林さんからは、人間の死に方について講義を受けた。原田さんは酔うほどに哲学的になり、人間のしあわせについて語った。『感動は前進、満足は後退』は、ある夜、酔いが深まって発した言葉である。笹谷さんは、酒に対して、日本に居るときとは全く異なる態度を示した。旅の安全を考える団長の立場と理解した。笹谷さんからは、チベットの現状について、食通の福本昌弘さんからは料理とワインの味わい方について教えられた。田中さんからは、未踏のチベットの山々について、伊藤寿男さんからは、最近登ったコンロン山の山について話を聞いた。奥宮さんからは、医学用の腹囲をはかる布製の巻尺を貸してもらったうえ、ログの寸法を測るのも手伝ってもらった。また、ナシ族のログについて教えられた。石根昌幸さんには、ラウオ（三八〇〇m）で血圧を測った時、一八三／七九の値に対して、何の心配も無いと慰められた。木村秀生さんは参加者の中で唯一人、非AACK会員であったが、これを機会にAACKに入りたいと熱く語った。

AACKは梅里雪山の不運な遭難で多くの仲間を失ったが、広範囲な多分野で活動する会員によって、創造的活力が今も伝統的に維

持されていることを実感した。

おわりに、ポタラ宮についてふれておきたい(写真一一)。一〇月二二、二三日の二日、外部から見学した。予約してなかったたので内部に入ることはできなかったが、世界の建築史に残る名建築であると感じた。一七世紀に建てられているが、石積壁の高層の外観は意外に現代的な感覚に通じる造形で意匠的にも優れている。構造は石造のようにみえるが、内部は柱、梁、床の重層の木造で、旅行中ずつと見てきた民家や寺院などと同じ、木と石による混合建築である。いずれ、また、チベットを訪れ、内部に入つてゆつくりと構造を観察したいと思つている。

参考文献

- 一、旅行人ノート、チベット第四版、旅行人、二〇〇六・八
- 二、堀江義人、天梯のくにチベットは今、平凡社、二〇〇六・三
- 三、富山 博、日本古代正倉建築の研究 法政大学出版社、二〇〇四・八

茶馬古道—グローバリゼーションとローカリズム

松林公蔵

二〇〇六年一〇月、私たち医師団四名は雲南高地での医学調査を終えて、笹谷べさん

を隊長とするAACKツァー隊に合流し梅里を参詣したのち、徳鎮から林芝を経てラサにいたるいわゆる「茶馬古道」を旅する機会に恵まれた。秀麗な山々と峨々たる氷河を超えんとすぐに大峽谷に下り渡河して、また登り返すと上高地の梓川を思わせるようなせせらぎがある。さらに高度をあげてふたたび氷河の山麓へ踏み入ると、氷河湖畔に点在する村々では、時代の潮流は避けがたく押し寄せているものの、人々は悠久の時間に守られたような古来の生活を守っていることに気づく。昼は移ろいやすい湿潤ヒマラヤ特有の氣候と生態系の変化を愛で、人々の営為の時代的推移がまことに変転きわまりないことを実感しつつ、宵は山岳部の昔にもどつて、一〇名ほどのゲマインシャフトが盃酌み交わす梁山泊の一〇日間は、ほんとうに贅沢な旅であつた。

「茶馬古道」は、四川省からの西行路(川藏公路)と雲南省のシーサンパンナから大理、麗江、徳鎮を経ての北上路(滇藏公路)が芒唐(マルカム)で合流したのち、チベットのラサにいたる全長二千数百キロにおよぶ難路である。しかしこの道は七世紀の唐の時代、多いときには数千頭の馬やヤクを連ねた大隊商が、四川と雲南原産の茶をはるばるチベットに運び、さらにはネパール、インドにも通じる大交易路として栄えた。北のシルクロードに対して知名度は低いものながらティールードと称され、街道のところどころには紀元前一六〇〇年頃の殷時代の石棺が発見されて、考古学者によればこのルートの起源は紀

元前三千年にさかのぼるとされる。

約一〇日間のジープキャラバンを通じて、高所で現在急激に変化しているグローバリズムの実相とそのうねりを実感しつつも、地域固有の智慧と麗しさを再認識した。

平井ポコさんたち神戸大隊が試登したルオニー峰の山麓、氷河湖畔にオアシスを形成する来果村では、学校にヤクの糞といくばくかの薪を燃料とする竈と併行して焦点温度二〇〇〇度にも達するという太陽炉が据え付けてある。着任したばかりの若い女性教師は常に携帯電話を離さないが、かつての映画「二十四の瞳」を思い起こすように子供たちに慕われていた。老若男女総出で大麦の脱穀に余念のない姿は悠久の時間を思わせる。ヤク二頭を売つてバイク一台を購入し、そのバイクの燃料をまかなうためにまたバイクで近隣の町にガソリンを購入しにゆくのも今日の日課であろうか。徒歩あるいは馬にかわつてバイクによる移動のせい、中年のラマ僧はやや肥満気味であるが、伝統的法灯には疑問はないようだ。ここ一〇年、人口の漸次高齢化はチベット村落でも例外ではなく、足腰に支障のある老人も多くみるようになったが、鎌を帯にさして、刈り取りに手を貸す生活形態はかわつていない。農作業自体がリハビリであり生き甲斐となつているようだ。

二一世紀の人類が共有する課題は、グローバリゼーションを、ローカルな個別地域のもつ知恵と構想力を相互に尊重する対話と協働のグローバリゼーションへと変革していくことであろう。今まで、山々と氷河にばかり気

をとらわれていたが、「高所」に住む人々の
営為の普遍性と多様性、そしてその変容を見
つめる楽しみを感得できた旅であった。

茶馬古道 東チベット一八〇〇 km キャラバン

石根昌幸

二〇〇六年一月一日、ラオウ(然鳥)
の水河湖に隣接するホテルの庭は、夕暮れの
紅色をした柔らかな日差しに包み込まれてい
た。標高三九三五mに位置するため、外気は
寒く、通り抜ける風は冷たい。防寒具を身に
まとつてはいるものの、その目の前に広がる
景色に魅了されながら、我々東蔵考察団一行
は、たたずんでいた。南東には、未踏峰であ
るドジツエンザ峰のピーク五六六二mのみを
照らし出している。北の丘には、帰り道を探
しながら急斜面をおりてくる羊の群れを目に
することができ。美しく静かな刻々と変
わつていく色の変化に、この東チベット紀行
に参加したメンバーが、ゆっくりとした「贅
沢な時間」を過ごした。

我々がキャラバンを行った「茶馬古道」と
いう響きは、茶の一大生産地である雲南省を
知っているものなら、そのお茶と「チベッ
ト」の馬の交易路であることは、容易に想
像できるであろう。ラサへと続く茶馬古道
は、揚子江、メコン、サルウィンの三大河川

が、わずか六〇kmの間を併走しながら、三江
地帯と呼ばれる地球上で最大規模の峡谷をい
く。東チベットは、五〇〇〇mから六〇〇〇
mの未踏峰がその源となり、その三江をはぐ
くみ、山々の姿は、まるで人を寄せつけない
ように、幾重にも重なつていき、外的から神
聖なるラサ、チベットを守るいわば守り神の
ようであった。しかし、今回の「東チベット
紀行」は、私の脳裏にある「チベット」のイ
メージとは程遠い多彩なチベットとなった。
一九九六年、ラサからティンリ、そしてカ
トマンズに抜ける西チベットは、荒涼とした
高原に広がる地域であり、オアシスを除けば
緑の乏しい平原、厳しい「高所」を語るに相
応しい風景であった。一昨年、初めて梅里雪
山の麓、明永村を訪れた折、徳欽からラサへ
と続く道が、今までとは異なり舗装路は消え、
「ここからは、外国人は入れません。」と言わ
んばかりの様相であった。そして今回はその
先のチベット、ラサへの道は、どういったも
のであるうか、という思いを描きながら旅を
した。五〇〇〇m近い数々の峠を越え、
そこには、雪化粧をした山頂、その斜面には、
赤や黄色の紅葉が一面に山々を覆い尽くして
いる。また、ラサに近づくにつれ、バスやト
ラックの行き交う道に五体倒地でラサに向か
う仏教信者の姿があった。現在では、この古
道も変貌の時を迎えている様で、東南アジア
諸国や中国のモーターゼーションのご多分に
漏れず、バスやトラックが多量の物資と人々
が行き交う様になり、今後、道々に見られた
馬は姿を消していくのであろうか。

茶馬古道に見受けられた、古き文化と新し
き文明の混在は、日々、変化を遂げていくの
であろう。私は老年医学を専門にしているた
め、地域に暮らす高齢者に目をやることが多
い。低酸素、平均気温が低く、農作物や畜産
物の多様性の少ない、この厳しい環境に生き
る人々の姿は、ほかの平地にある東南アジア
の人々と何ら変わることはない姿であった。
我々が昨年、医学調査をしたシャン格里拉の
高齢者達は、医学的には、血圧が高く、酸素
総和度は低い、という特徴はあるものの、む
しろ毎日元気に運動し、元気に働いていると
いうことが判った。その人々が営む暮らしと
いう営みは、この時期、谷を囲む段々畑に
は、黄金色に輝くチンコウ大麦が収穫の時期
を迎えており、忙しそうに村人が協力して家
の屋上に積み上げた大麦を脱穀し、来るべき
冬に備え収穫をしている。高齢者はその子や
孫の面倒を看ている。また、さらに高齢とな
り、歩行のおぼつかない高齢者は、娘であろ
うか、ゆっくりと歩く母親を、見守るよう
に付き添って歩く印象的な姿があった。いつま
で、こういった景色に出会えるのであろうか。
そういった思いを抱きながら、ラサへの旅は
終わりを告げた。

最後に、この貴重な機会を与えてくださつ
た笹谷哲也さん、寺本巖さん、原田道雄さん、
田中昌二郎さん、伊藤寿雄さん、福本昌弘さ
ん、松井千秋さん、及び松林先生、奥宮先生、
木村さんにこの場を借りて、深く感謝申し上
げます。

事務局報告

去る三月一八日に定例の理事会が開催され平成一九年度事業計画ならびに予算などが審議されました。以下に決議録を掲載します。事業計画と予算の通常事業については、例年と特に変わりはありません。特徴的な点は決議録に記載されているとおりです。決議録に記載されていない理事会の審議内容について二点、概略をご説明します。

一、梅里雪山隊の現地捜索などについて

・会員小林尚礼から二〇〇六年度の現地状況、本年度までの捜索の成果、次年度の活動計画が説明されました。

氷河の流れと、氷河末端の後退により、来年度には遺品・遺体のあると思われる部分は末端に達して川に流出する可能性が高く、次年度は昨年までと同様のパトロールが必要と判断し、昨年同様の予算(一〇〇万円)を調査補助金で支出することを決めました。氷河末端は氷河が薄くなり、またその下の河川はゴルジュ帯で流水量も多いため、安全には充分注意しつつ、現地村民の協力を得ながら捜索を行うことを確認しました。

・飛来寺の慰霊碑について

会員小林尚礼から、飛来寺付近に一九九一年春に設置された碑の日本隊員名を削るような作業が二〇〇四年度以降著しくなったこと、現地を訪れた家族には補修を望む声があることが報告されました。日本側の意思だけ

で決められない問題であり、これまでどおり、中国側の責任者である張俊氏との日本側の交渉役に中川潔理事があたり、今後の対応について連絡、協議することを確認しました。

二、公益法人制度の改革について

・平成一八年六月二日に交付された公益法人認定法に従い、それから二年六ヶ月以内に法律が施行され、五年間の移行期間の間にAACKは公益社団法人または一般社団法人に移行する必要があり、移行手続きを行わなければ解散とみなされ、資産は同目的の他の法人に帰属させられます。一般社団法人への移行を目指すことを確認しました。

理事会決議録

一、日時 平成一九(二〇〇七)年三月一日(日) 午後一時~午後四時三〇分

二、場所 京都市左京区田中関田町 京大会館SR室

三、出席理事 木村雅昭、前田栄三、上田豊、福富義宏、横山宏太郎、永田龍、吹田啓一郎、竹田晋也、小林尚礼 以上九名

委任状によるもの

田中昌二郎、松沢哲郎、松林公蔵、中川潔、高尾文雄、山田和人、人見五郎、牛田一成 以上八名

四、議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達し

ているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案

平成一九(二〇〇七)年度事業計画について理事吹田啓一郎によって作成された平成一九(二〇〇七)年度事業計画が説明された。第一事業第一項(一)でアジア・アフリカ地域研究研究科における文献資料の目録が既に作成され、さらに京都大学総合博物館の資料目録の作成が継続されること、第四事業第三項でヒマラヤ学誌八号の会員配布が予定されていること、また第四事業第一項で隔年発行の会員名簿は平成一九年度が発行年であることを確認し、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案

平成一九(二〇〇七)年度収支予算について理事竹田晋也によって作成された平成一九(二〇〇七)年度収支予算が説明された。特にヒマラヤ学誌の会員配布に事業費支出の印刷製本費から支出すること、中国雲南省における梅里雪山隊捜索関連作業に特別会計遠征基金の調査助成金から支出することなどについて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案

遠征基金の運用について第二次梅里雪山峰登山隊の現地捜索について、会員小林尚礼から活動報告ならびに次年

度計画について説明があり、平成一九年度の現地捜索に対して特別会計の支払い調査補助金から一〇〇万円を支出することについて、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学士山岳理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

(文責：事務局 吹田啓一郎)

AACK海外登山・探検助成制度の案内

(事務局 吹田啓一郎)

昨年度から始まった会員個人の海外登山や探検的な活動を支援する助成制度を今年度も実施します。応募される方は下記の要領でお申し込み下さい。昨年度は寺島彰会員の「川旅・Sheffield」が採択され、その成果は既にニューズレターで報告されたとおりです。例年、三月に採択の審査を行います。今年はまだ応募がありませんので受付期間を四月以降に延長します。五月の総会までに採択を決定する予定にしていますので、海外登山・探検を計画されている会員には奮ってご応募ください。

一、申請方法

下記の事項（申請時の予定でよい）を記した会長（木村雅昭）宛の申請書（A4紙に五枚以内）を作成してください。送り先はAACK事務局長宛に郵送、あるいはPDFを電子メールでお送りください。送り先：

- (一) 隊または計画の名称
- (二) 申請会員名と連絡先、Eメール等
- (三) 隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）.. AACK会員外の参加も認めます
- (四) 対象国・山域・地域
- (五) 概略のルートと日程
- (六) 予算
- (七) 隊の特徴などのアピール（計画の目的、意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）
- (八) 助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

二、海外登山・探検助成制度 運用規定

第一条 海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、パイオニア的ないしオリジナリティのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員

の任期は二年とし、再任を妨げない。
第四条 助成金額は一件一〇万円を原則とし、年間三〇万円を上限とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 本規定は二〇〇五年五月一五日の総会の承認を得て施行する。

申し合わせ事項

- 一 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。
- 二 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はAACKニューズレターならびにホームページに掲載する。
- 三 一計画につき一申請だけ受け付ける。

(文責：事務局 吹田啓一郎)

日本山岳協会・山岳共済の案内

(事務局 吹田啓一郎)

AACK会員の皆さまへ、日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への本年度の加入方法などについてのご案内です。平成一九年度から制度や条件が少し変わりました。また、後遺の保障金額が若干変更されました。また、山行中の疾病（高山病を含む）が原因の遭難捜索費用も原則支払われるようになった点、海外登山共済では緊急救助のヘリコプター費用が保障される点を確認しました。加入を希

望される方は次の要領で手続きを行ってください。山岳共済の条件として加入者は山行時に所属山岳会（A A C K）へ登山計画書を提出することが義務づけられております。この制度の運用に必要な業務は堀内潭様、阪本公様に委託し、ご協力をいただいております。

一、山岳共済の種類

国内山行を対象に山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。山岳登攀コースは次の五種類の基本タイプが用意されており、さらに入院・通院補償と海外山岳共済の二種類の追加オプションがあります。

(一) 山岳登攀コースは表1の五種類です。

(二) 海外山岳共済

平成一九年度からは登山期間及び対象の山によって保険料が決められることになりました。海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前に堀内さんを通じ山行計画書を提出して保険料の見積りを取ってください。

ちなみに、例えば今夏にインド・ヒマラヤへ三六日間のトレッキングに行かれる阪本さん達の計画にたいしては、左記の見積りがだされてきました。

傷害死亡・後遺保険金額 100万円
 救済者費用等保険金額 500万円
 賠償責任保険金額 1億円
 見積もり保険料 8,360円

(三) 軽登山コースは表2の二種類です。常時、ピッケルやアイゼン、ザイル等を使用しないで登れる軽登山行為をいいます。よって、岩

登り、沢登り、スキー登山、冬の雪山等は軽登山コースの対象とはなりません。
 (四) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入も受け付けられません。

二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、A A C Kの指定する山岳共済担当者（堀内潭様）に提出し、指定の銀行口

表1

基本契約タイプ	S	B	C	D	E
死亡・後遺	100万円	136万円	269万円	438万円	1100万円
救援捜索費用	100万円	200万円	250万円	350万円	500万円
個人賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	3000円	5200円	7000円	10000円	17000円
山岳共済会費	1000円	1000円	1000円	1000円	1000円
合計支払金額	4000円	6200円	8000円	11000円	18000円

入院保険金額	3300円	3300円	3300円	3300円	3300円
通院保険金額	1195円	1195円	1195円	1195円	1195円
保険料	4000円	4000円	4000円	4000円	4000円

入院付契約					
合計支払金額	8000円	10200円	12000円	15000円	22000円

表2

	タイプ-1	タイプ-2
死亡・後遺保険金額	221万円	332万円
救済者費用保険金額	300万円	300万円
個人賠償責任保険金額	1億円	1億円
入院保険金額	2000円	4000円
通院	0	1700円
保険料	2000円	5000円
山岳共済会費	1000円	1000円
合計支払金額	3000円	6000円

座に会費を振り込んでください。
 (二) 加入申込書には次の八項目を記入してください（書式自由）。
 ① 氏名（フリガナ）
 ② 生年月日
 ③ 郵便番号と住所（フリガナ）
 ④ 電話番号、FAX番号
 ⑤ 電子メールのアドレス（ある場合）
 ⑥ 職業
 ⑦ 加入タイプ（A～E）と入院・通院補償、海外山岳共済の追加希望
 ⑧ 他の山岳保険の加入状況（一般的な生命保険は含まず）
 担当者の連絡先は次の通りです。できるだけ電子メールでお送り下さい。

い。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行(沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行)で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、

留守本部、最終下山日、共同及び個人装備食料(実働・予備日明記)

(三) 登山計画書の提出先は阪本様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して sutosakanoto@cronos.ocn.ne.jp へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。

〒603-8343 京都市北区等持院東町1-1

阪本公一宛 (Tel/Fax: 075-461-0031)

(四) 下山後、阪本様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 阪本様が担当するのは登山計画書のとりまとめで、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生時の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の加入をお断りします。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の堀内様にお問い合わせください。また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。

<http://www.jma-sangaku.or.jp/>
sangakukyouusukai/

四、その他

(一) 緊急救助のためのヘリコプター費用に関する確認。

海外登山共済で、緊急救助のためのヘリコプター費用について、平成一七年一二月一四日付で山岳共済事務センターから次の二点を確認しています。以下、その質疑応答です。

【質問一】高山病等の疾病の場合も含み、現地からの搬出移送にヘリコプターを使用した場合、その費用は保険金の対象となるか？

【回答一】緊急な捜索・救助活動を要する状態となった事が警察などの公的機関により確認された場合で、ヘリコプターを使用した実費は保険金の対象となります。保険金請求の際には、遭難の公的証明書、ヘリコプター費用の支払領収書原本を保険会社に提出する必要があります。

【質問一―二】(上記「回答一」に対して更に質問しました)警察や軍のヘリコプターではなく民間のヘリコプターを使用した場合は公的証明書ではなく、病院の医師の診断書で証明されれば十分ではないか？

【回答一―二】医師の診断書により緊急な捜索・救助活動を要する状態と確認できる場合はお支払いの対象となります。公的機関の位置づけは、医師の確認(証明書)でもかまわないということです。お支払いできるといいます。

三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい

(三) 担当者(堀内様)が山岳共済事務センターへ加入申込みと会費の振込みを行います。この振込日の翌日から保険は有効です。振込の翌月に日本山岳協会より一般共済会員証が担当者に送付されてくるので、担当者から本人に回送します。

年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二五日(山岳共済事務センター着)です。中途加入の場合毎月二五日までに日本山岳協会事務センターに加入申込みをし入金を確認できた場合に、翌月一日から次の四月一日午後四時まで保険が有効となります。従いまして、毎年三月十五日までに担当者(堀内さん)へ申し込みと会費振込みをしていただければ、四月一日から有効となるよう手続きをします。途中加入の場合も原則一五日までに担当者へ申し込みと会費振込みをしていただければ、翌月一日から有効になるよう手続きをします。

【質問二】現地からの移送費用は、被保険者が継続して七日以上入院の場合のみ対象となるとされているが、例えば①海外で六日入院し、帰国後六日入院した場合はどうなるか？
②海外で六日入院し、帰国後七日以上入院した場合はどうなるか？

【回答二】①②ともに、帰国後すぐに入院され、その移転については治療の為に医師が必要と認められた場合に限り、継続した入院日数とみなします。

上記条件を満たした場合、①は一・二日入院・②は一・三日以上の入院となり、保険金の対象となります。また、現地からの移送費用等、救援者費用担保特約の支払条件は、被保険者が七日以上入院した場合の他、被保険者が死亡した場合や捜索・救助活動を要することが警察などの公的機関により確認された場合なども対象となります。

以上

(文責：事務局 吹田啓一郎)

AACK総会の案内

平成一九年度のAACK総会は、五月二十七日(日)午後三時から、京大会館で開催します。詳しい案内は別に往復ハガキでお送りします。出欠ならびに欠席の場合の委任状の返信を期日までにお願ひします。総会後のアトラクションには寺島彰会員による「川

旅：Sheenick」の報告を予定しています。

今年には会員名簿発行の年にあたりますので、名簿記載事項に変更のある方は返信ハガキでお知らせ下さい。既にニューズレターに掲載された修正は既に名簿原稿に反映されています。

皆さまのご協力をよろしくお願い致します。

(事務局 吹田啓一郎)

栄誉・受賞のお知らせ

本多勝一会員が昨二〇〇六年九月二四日、侵華日軍南京大屠殺遇难同胞記念館・特別貢献奨章をご受賞されたとお知らせ頂きました。

会員動向

息子」は、「宗作さんの息子」と訂正します。

新井 浩

編集後記

ニュースレターNo. 41の発行が、編集子の不手際により遅滞いたしましたことを、お詫びいたします。

なお、次号No. 42の原稿締め切りは五月末日、発行は七月初旬を予定致しております。どうか奮ってご投稿願います。

(田中昌二郎)

訂正

AACKニューズレター前四〇号、「南極観測五〇周年記念」

二七ページ中段一六行目

「宗弘氏は白頭山の時のガイド・栄作さんの

編集委員 田中昌二郎

発行日 二〇〇七年四月末日

発行所 京都大学学士山岳会

千六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所